
水樹 裕 短編集

水樹裕

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

水樹 裕 短編集

【Nコード】

N5806A

【作者名】

水樹裕

【あらすじ】

ちよつとSF。ちよつとファンタジー。ちよつと恋愛。ちよつとミステリー。ちよつとホラー。さまざまなジャンルの短編集です。

第一話 人魚姫（前書き）

ちよつとくいな短編集です。

色々なジャンルに挑戦して行きたいと思います。

少しでも、楽しんで頂けたら幸いです。

第一話 人魚姫

『王子様は、本当にいるのかしら？』

蒼い満月の掛かる夜空を見上げ、人魚姫は思いを馳せる。

こうして海の上に出られるのは、月に一度の満月の夜だけ。

幼い頃に聞いた『人魚姫』の童話。

嵐の夜に、『王子様』を助ける人魚姫。

そして、王子様に『恋』をするのだ。

運命の、悲しい、実らぬ恋を……。

「本当に王子様がいるのなら、例えば実らない恋でもいいから、会いたいなあ……」

『例え、海の泡になっても構わない』

そう思えるような、そんな王子様に会いたい。

「はあっ……」

今年十六歳になる姫は、父王の決めた婚約者と結婚しなければならなかった。

別に婚約者が嫌いな訳ではないけれど、ちょっとくらい、夢見る乙女を演じてみたって、いいと思う。

姫は一人寂しく、心の中で積もる思いを反芻する。

「姫様！ もうそろそろお戻りにならないと、危険でございますよ」

従者のマンボウに、クリクリとひょうきんな丸い目をむきながら、釘を刺された姫は、小さなため息を一つ吐き出した。

そんなことは、百も承知だ。危険だと知っていても、来てみたい。それが乙女心っていうものなのだ。

「何せ、人間のまき散らした『放射能』ってヤツが充満していますからね。いくら中和剤をお飲みになっても、お体に触ったら大変でございます！」

眉間にシワを寄せて言う彼に、姫が問う。

「ねえ？ 王子様っていると思う？」

「昔は、あちらこちらに沢山いたようですけど、今はほれ、あの通り。『核戦争』ってヤツで、陸の生物がほとんど絶滅してしまいましたからねえ。残っているのは、『ゴキブリ』とか言う小さな黒い虫だけですよ」

彼らの視線の先にあるのは、廃墟。

昔は『TOKIYO』とか言う『最先端の未来都市』だったらしいが、今は、飾る色のないモノクロームのゴミの山だった。

人間がまき散らした『放射能』は、少なからず彼ら海の住人の生活をも激変させてしまった。生態系は破壊され、かなりの海の生物が滅んでしまったのだ。

もし、彼らの科学力がこれ程進んだ物で無かったら、この地球上の生物はすべて滅んでしまっていただろう。

「さあ、帰りましょう、姫。父王様が心配しておられますよ」

「ええ、そうね。なんだかお腹も空いてきちやったわ」

姫が、クスリと笑う。

「今日のおやつは何かしら？」

そう言って人魚姫は、水面に綺麗な波紋を残して、海中に消えた。やれやれ、未来の海王様の母君になられるおかたは、まだ、色気より食い気だわ……。

ちやぽん。

マンボウが軽くため息を付いて、姫の後に消える。

後に残るのは、ただ静かに寄せては返す波の音。

それは、人類が、自らの愚かしさにより滅びの道を選んでより、百年後。

蒼い満月の掛かる夜、東京湾での出来事。

終わり

水樹 裕 短編集

第二話 吸血姫

「はい、どうぞ」

瞳は、入れ立てのモーニングコーヒーをテーブルに置く。それを、口に運ぶ哲の様子を、興味津々で見つめていた。

『ブツ！』

哲は、一口、口に含んだコーヒーを勢いよく吹き出し、「ごほごほとむせながら、瞳の方を軽く睨んだ。

「な、なんだこれは……！？」

「何って、コーヒーだよ。おろしニンニク入りの」

睨み付けられていることなど何処吹く風の答えに、哲が額に手を当てて盛大なため息を付いた。

「……お前は今まで、コーヒーに『おろしニンニク』を入れて飲んでいたのか？」

「まさか！ そんな変態なこと、するわけないじゃない」

瞳は、いたずらっ子のようにクスクスと笑いながら、「吸血鬼って、本当にニンニクが嫌いなのかなあって思っつて。えへへっ」と、悪びれもせずぺろりと舌を出し凝りもせず次への攻撃に入った。

「はい！ これは？」

丸いまんまのニンニクを、右の手のひらの上に載せて哲の鼻先に突き出したかと思うと、すかさず左手を突き出す。

「これとか！」

ぎゅむっ！と握られているのは、銀色をした十字架のペンダント。

驚いているというより、最早諦めの極地に到達しているような哲の表情に臆することもなく、更に奥の手を繰り出す。

「んで、これっ」

語尾に音符マークをるんるんと踊らせながら、ニンニクの変わりにこれでもかと握られて居るのは、何をどうしたのか何故か呪いの

わら人形だった。

瞳は、次々と『吸血鬼撃退グッツ』を哲の前にかざしては、哲の反応を至極楽しげに、かつ、興味津々で見詰めていた。

「……普通の、ブラックのコーヒークれ」

『こんな、おちゃらけた性格とは思わなかったぞ』

普段は余り表情を動かさない哲が、微かに口の端を上げる。それは『苦笑』ではあったが、どうにか笑いの部類に入るものだった。

昨夜。

哲は、街で交通事故に遭って死にかけていた瞳を助けた。

人気の無い深夜の交差点で、ひき逃げにあったのだ。

一目で命に関わる重傷と知れた。

人間に関わる気など無かった。

吸血鬼である自分と、その獲物である人間。それだけだ。他に何も必要など無い。

苦しそくに喘ぐ瞳に冷たい一瞥を投げ立ち去ろうとしたその時、

瞳が声にならぬ声を上げた。

「ど、して、泣いて……るの？」

「……何を、言っている？」

自分は泣いてなどいない。そんな人間のような感情は持ち合わせていない。

「泣いて……るよ？」

瞳の言葉に、哲は自分の頬に手を当てて愕然とした。その頬は、涙で濡れていたのだ。

何を泣くことがある。ただ、人間が一人死んだだけだ。

少しばかり深く関わり過ぎた人間。

『あなたが何者でも構わない』そう言って、ずっと一緒にいた人間の女。

彼女が不治の病で余命が無いと知ったとき、哲は彼女に問うた

。

『吸血鬼となつて共に生きるか?』と。

だが、彼女の答えは『否』だった。

『何者でも』の範疇に『吸血鬼』は入っていないかったのだ。

彼女は、人間としてひっそりと死んだ。

もう、この街に居る理由が無かった。当てもなく街に出たところで瞳の事故に遭遇したのだ。

哲は、自分でも馬鹿げてると思った。また性懲りもなく、人間の女に関わってどうする。

人間は、本能的に闇を恐怖する。それは、闇に潜む捕食者の存在を感ずるからだ。その捕食者である自分が、捕食される側の人間をどうしようと言うのだ?

また、恐怖の目で拒絶されるだけだ。

ならば、最初から関わらない方がマシだ。

だが、そう思いつつ、哲の口から出たのは正反対の言葉だった。

「生きたいか? 吸血鬼になっても生きたいと言うのなら、助けてやる」

驚きに、見開かれた瞳のその目を見たとき、『やはり』と言う思いが哲の心をよぎった。

諦めて、立ち去ろうとしたとき、そのコートの裾を瞳が掴んだ。

「生きたい」

そう言つて気を失った。

哲は、『我ながら、馬鹿げてる』と思いつつ、跪いて瞳を抱え上げ。

そして、その白い首筋に白い牙を立てた。

「はい、どうぞ」

瞳が、新しく入れ直したコーヒーを哲の前に置く。

いぶかしげにコーヒーカップを覗いている哲の様子を、瞳は楽し

そうに見つめる。

あの時、瞳があ場所に居たのは偶然では無かった。

余命が幾ばくもない彼女に付き添っている哲を、看護師である瞳は知っていた。

ずっと、気になっていた、不治の病に冒された恋人に寄り添う、どこか翳りのある黒髪の青年。

偶然聞いてしまった『吸血鬼となって、共に生きるか?』と言う哲の言葉を、ああ、そうだったのかと、瞳はなぜかすんなりと納得してしまった。

そして、恐怖に駆られ、それを拒絶した彼女の答えに、憤った。

自分なら、『喜んで一緒に生きる』と返事をするのに、哲に対する己の気持ちに、瞳はその時初めて気付いた。

この感情が『恋』であると。

だから彼女が死んで、ただ静かに涙を流す哲を見かけたとき、いてもたってもいられずその後を追ったのだ。

元来のドジが祟って、まさかひき逃げ事故に遭うとはとうの瞳本人も予想外ではあったが。

「生きたいか? 吸血鬼になっても、生きたいと言うのなら、助けてやる」

哲の言葉が、嬉しかった。

例えばそれが、恋人を失った寂しさから出た言葉でも、瞳は嬉しかったのだ。

「哲?」

「なんだ?」

新聞に落としていた視線を、哲がちらりと上げる。

「哲って呼んでもいい?」

すでに呼んでいるだろうに……と、思いながら哲は、今度は微かに目を綻ばせた。

これから先は、退屈しないですみそつだ。

「好きにしる」

「えへへっ、哲、テツ、てっ、TETU」

これから先。

二人の間に何が育まれるのか。

それが、愛か憎しみか。

それは、神のみぞ知るものだろう。

十二月の寒い朝。

昨夜生まれたばかりの『吸血姫』は、上機嫌で朝食の準備を始めた。

終わり

第二話 吸血姫（後書き）

吸血鬼が出てくるのは、ファンタジー？ ホラー？
やっぱり、恋愛でしょうか。

第三話 ゴールデン・フィッシュ号危機一髪！(前書き)

SF&ファンタジーな感じですよ。

第三話 ゴールデン・フィッシュ号危機一髪！

『緊急事態発生！ 緊急事態発生！』

乗員三名、さほど広くない宇宙船のコクピット内に、エマージェンシー・コールが響き渡った。危険を知らせる赤ランプが点滅し、細かい機器類を浮かび上がらせる。

「どうした、何が起こってる！？ 報告しろ、BB！」

宇宙探査船 『ゴールデン・フィッシュ号』 の船長、ロック・サンダース大佐は、仮眠から覚めたばかりの脳細胞をフル稼働させながら、コクピット後部にある指揮席に滑り込むと、モニター前で操船を一手に行っている人型コンピューターBBの、金属質のつるんとした黒い後頭部に、怒声を浴びせ掛けた。

「BB！ まだか！？」

普段は明朗闊達、例えコンピューター相手でも無闇に怒鳴りつける様なことはしないロックなのだが、場合が場合である。

ワープ中の事故。それはすなわち即、死に繋がる一番恐ろしい事故だった。

いや、死ぬだけならまだいい。最悪、元の空間に戻れず、永遠に時空の狭間を漂う事になりかねない。『幽霊船ゴールデン・フィッシュ』なんてのは御免被りたかった。

「BB！？」

「ただ今、解析中です。今分かっているのは、ワープ用エンジンの

「トラブルという事だけデス」

妙にのんびりとした答えが返ってくる。

相手はコンピュータである。逆に慌てられても困るが、もう少し急いでくれ！

内心ではそう思ったが、らちもない事を言っても何の役にも立ちはない。

「副長！ ワープアウトは可能か？ BBはトラブル解析で手が離せない。計算してくれ！」

「了解！」

副長のきびきびとした答えが響く。

副長のレイア＝マードック中尉は、ロックより五歳年下の二十五歳。グラマーな美人である。

黒い瞳がスタンダードな彼らの一族において、色素の薄い茶色の瞳の彼女は、ある意味異質な存在だった。

不吉だと言ってそれを嫌う者は確かにいたが、ロックはその美しい瞳が気に入っていた。

まあ、有り体に言えば、レイアはロックの恋人であるのだが。

「五分後のワープ・アウトが可能。ワープ・アウト地点は、太陽系第三惑星『地球』。惑星レベルはZです」

「惑星レベルZ！？」

レイアの報告に、ロックは驚きの表情を隠せない。『惑星レベルZ』とは、国交の無いいわゆる『発展途上惑星』を意味してい

た。

「惑星のタイプは？ 知的生命体はいるのか？」

「惑星のタイプは、我々の母星と同じスタンダード。空気組成もほぼ同じで、直呼吸が可能。知的生命体の存在は確認されています。タイプは、我々と同じ 『人型』。言語も何とか翻訳可能です。ただ……」

「ただ？」

いつもの彼女らしからぬ歯切れの悪い物言いを不信に思いながら、ロックが聞き返す。

「時代が、我々の文明での 『恐竜期』 に酷似しています」

「恐竜期だって！？」

肉食の恐竜がウロウロしていると言う事が 。

だが、このまま手をこまねいては、事態はどんどん悪い方へ行くだけだ。

ワープ用エンジンが使えなければ、遙か彼方の自分たちの活動宙域までは、到底たどり着けない。

救難信号が探知され、運良く捜索隊が出されたとしても、ここは通る船など滅多に無いと僻地の宙域だった。恐らく見付け出されるまでに、この小型探査船の物資では、生き残れまい。

例え発展途上であつても惑星上ならば、修理に必要な物資の補給も可能だし、少なくとも、飢え死にする事は免れるだろう。

より、生存確率の高い方。ロツクは、数瞬の間に結論を出した。

「ワープ・アウト！ 『地球』 に着陸する」

「了解」

神業のような早さで操作パネルの上を移動する、レイアのしなやかな指先を見つめながら、ロツクは、そもそもの“ケチ”の付き始めの原因となったサイナス中將のゴキブリ顔を、苦虫を噛みつぶしたような表情で、思い出していた。

ロツクはもともと、大型戦艦の副長をしていた。

上官で艦長のサイナス中將は貴族のぼんぼんで、部下に影で『ゴキブリ野郎』とあだ名される、陰険で鼻持ちならない男だったが、ロツクは別段何の問題も無く、淡々と副長の任を全うしていた。あの時まで。

ある日、デート中のロツクとレイアを見掛けたサイナス中將は、レイアを一目で気に入った。

母星に帰れば妻も子供もある身であったが、貴族の常と云うか傲慢さと言っか、『部下の物は自分の物』と考えるきらいのあるサイナスは、実力行使に出る事にしたのだ。

「ロツク大佐の事で重要な話がある」

そう言っってレイアを自室に呼び出したサイナスは、力づくで彼女を自分のものになろうとしたが、寸前で助けに入ったロツクの手により、半死半生で病院送りとなった。

結果、ロツクは上官への暴力行為で、辺境を巡る探査船の船長に

体の良い左遷を食らったのだ。

左遷で済んだのは、レイアに対する暴行未遂があったからだが、実はレイアが軍の実力者の妾腹の孫娘で、そこから圧力が掛かった、と言つのが知られざる真実であつた。

でなければ、いくら志願したからと言って、こつも都合良く彼女が『ゴールデン・フィッシュ号の副長』として任官される訳は無かつた。

ワープ・アウトした彼らの目前に、青い色彩が広がる。

まるで闇夜に浮かんだ青い蜃気楼のような、美しい星。それが地球だつた。

「綺麗……。海の比率が、私たちの母星とは逆なのね。『地球』
と言つより、『水球』ね」

レイアが溜息混じりに呟く。その間も、操作パネルの上の指先は着陸のための準備を着々と進めて行く。

「軌道計算完了。三分後に大気圏突入、着陸体勢に入ります」

「頼むぞ、レイア」

東の空に、金色に輝く光の玉が長く尾を引いて、ゆっくりと地平線の彼方へと消えて行った。だが、それに気付いた者は誰もいなか

った。

「着陸完了。船体の損傷はありません」

「ご苦労さま。さて、問題はワープ用エンジンの方だな。BB、原因は分かったのか？」

ロックとレイアの視線に動じる風もなく、BBがのんびりと答える。

「水が足りマセン」

「はあ！？」

BBの答えに、ロックが思わず頓狂な声を上げてしまう。

「冷却水が、何らかの原因で不足しています。エンジンの老化による過加熱のために蒸発したものと思われマス」

「ボロいせいで、オーバーヒートしたって言うのか？」

まさか、あのゴキブリ野郎の差し金じゃないだろうな。

一瞬、そんな考えが頭によぎったが、さすがに自分一人を消す為に、乗務員ごと探査船を葬るような真似はするまいと思ひ直す。

(どうも、考え方がネガティブになり過ぎているな……)

ロックは、頭をぶるんと一振りすると、今やるべき事に思考を巡らせた。

「BB、水の補給がされれば、基地までのワープ航行は可能か？」

「可能デス」

「必要量は？」

「圧縮カプセルで五個分デス」

圧縮カプセル五個分。重さで、十キロ。人力で運搬可能か。

圧縮カプセルとは、その名の通り、物質、主に水を圧縮して運搬するのに使われるカプセルで、水だと百分の一に圧縮が可能だった。つまり、カプセル十キロの水というのは、実質一トンの水を指すのである。

「BB。留守の間、細かい部分のメンテを頼むぞ」

「了解しまシタ」

探査船のハッチを開けると、そこにはまさに『恐竜期』の世
界が広がっていた。

空を覆う、鬱蒼と茂る巨木群。彼らの背丈ほどもある色とりどりの植物が、行く手の険しさ彷彿とさせた。気温は高いが、湿気はさほど感じなかった。

空の圧縮カプセルの入ったりリュックと携帯用のサバイバルキットを背負い、腰にはレーザー銃と小型の武器類。左手首に翻訳機。

軍人とは言っても、元々戦艦乗りのロックにとって、こんな装備で歩くのは、訓練の時以来である。

大佐と言う階級は伊達では無いので、それなりに体技にも自信はあるが、あくまで『訓練』に置いてである。

「すまん。どうも君には、貧乏くじを引かせてしまったみたいだ」
大型のナイフで草を切り分けながら進むロックの後ろで銃を構え、周りを警戒しながら、ピタリと付いて来るレイアに向かって、彼がすまなそうに呟く。

「何言ってるの？ あなたらしくもない。私の船長さんは、もっと自信満々でいてくれなくっちゃ！」

レイアの茶色の瞳が、陽の光を受けてキラキラと輝いた。

「そうだな。俺らしくないな」

右腕をレイアの頬に伸ばそうとしたその時、ズン、と地面が揺れた。

地震かと錯覚するような地響きが除々に大きくなって行く。

何か、巨大な物が近付いて来る。

二人は、さつと腰を落とし、臨戦態勢を取った。

「きゃああー！！」

エコーの掛かった悲鳴と共に、茂みの中から二つの小さい影が飛び出す。

「た、助けてっ！！」

ロック達を認めると、その二つの影は一目散に彼らの後ろに倒れ込んだ。

それは小人と呼べそうなくらい小柄な、二人の少女達だった。年は十歳程だろう。

金色の大きな瞳が、恐怖で更に大きく見開かれ涙が溢れ、小さな体が、傍目から見て取れるほどブルブルと震えている。

ズシン、ズシンと、地響きが更に大きくなり、けたたましい音と共に木を踏み倒したモスグリーンの巨大な足が、目前に降って来た。

「恐竜か!?!」

植物に妨げられて、全体像が把握できない。

ギャアア

咆吼と共に、鋭い爪を持った前足が振り落とされる。

ロックとレイアが構えていたレーザー銃を、同時に放った。

ジジジと肉を焼く音と、独特の臭気が鼻を突く。

世界から、音が消えた　と思った瞬間、ベキベキと大木をなぎ倒しながら、一際大きな地響きと共に、恐竜の巨体がゆっくりと大地に沈んで行った。

「大丈夫か、君たち!?!」

倒れ込んだまま、呆然と事の成り行きを見つめていた二人の少女達を、ロックとレイアがめいめいに助け起こす。ロックの掛けた言葉に、二人ともやっと状況が飲み込めて一安心したのだろう。ニコリと可愛い笑顔を見せた。幸い二人とも、何処にもケガは無いよう

だった。

「はい。どうも、ありがとうございます！ お陰で助かりました！」

まるで申し合わせたようにハモリながら、同時にペコンと頭を下げる。一卵性の双子でもあるのか、落ち付いて見れば、二人はとも良く似ていた。

「私は、二ノです」

「私は、ナノです」

どちらがどちらだか、既に分からなくなっているロックだったが、とにかく彼も自己紹介する事にする。

「俺は、ロック。彼女はレイア。実は捜し物をしていてね……。君たちは川か、湖か、この近くで水の汲める場所を知らないかい？」

「水？ 水だったら、近くに沼がありますから、お礼に、ご案内します！」

双子に案内されて、深いジャングルの奥へと、三十分ほど道無き道を進むと、突然、風景が変わった。

空を覆う巨木群は姿を消し、背の低い草原が広がっていた。その向こうに妙に金属質のつるつとした灰色の壁が見える。ロックは近づくにつれ、それが直径十メートルほどの巨大なパイプらしい事に気が付いた。

ロックとレイアが顔を見合わせる。

(これはどう見ても、人工物だな)

しばらく、そのパイプ伝いに歩くと小さな沼に到着した。

一応有害な物質が含まれていないか簡易の検査器でチェックをしたが、それは飲料水に出来るほどの綺麗な水だった。

何より驚いたのは、薬剤による殺菌がされていた事だ。

双子にそのことを尋ねてみたが、『昔からあったもので、村の長老でも、いつ頃からあって誰が作った物なのかは知らない』と言
う答えが返って来ただけだった。

(これは、水道管理システムではないのか？ もしかすると、この星の文明水準は、思ったより高いのかも知れない……。あるいは、過去の文明の遺産 なのだろうか)

水を確保し、恐竜の倒れている場所まで戻って来ると、一時間半ほど経っていた。

「ありがとう。君たちのお陰で助かったよ。逆にお礼をしなければ」

ロックが、サバイバルキットの中からごそごと携帯用の食料を取り出す。チョコレートとフルーツ風味の、クッキーに似た食感の高エネルギー食品。子供なら、おやつにちょうどいいだろう。

「こんな物しか無いけど、食べてくれ」

二人の頭を撫でながら、めいめいに手渡す。これ位なら大丈夫だろう。

ロック達の属する銀河連邦には、発展途上の惑星などに対する過

度の干渉を禁じる法律が存在する。進みすぎたテクノロジーを途上国に持ち込むのは好ましくない、と言う物だが、まあ、食べて無くなってしまう物なら問題は起こるまいと判断した。

「可愛い子達だったわね。あなたがあんなに子煩悩だとは思わなかったわ」

クスクスと楽しそうにレイアが笑う。

「ああ。もうそろそろ、子供がいてもいいな」

ちよっとぶつきらぼつに、ぼそりとロックが呟く。

「えっ？」

驚いて思わず足を止めたレイアが、ロックの顔をマジマジと覗き込む。

「え、と。プロポーズ、しているんだが……」

綺麗な薄茶色の瞳に見つめられて、照れながらロックが呟く。

本当は、今回の任務が終わったらプロポーズしようと、奮発して高級ホテルのスイートを予約し、給料三ヶ月分の婚約指輪も用意していたのだが、言ってしまったものは仕方がない。要は、形より心だ！

「レイア、俺と結婚してくれ。いや……、結婚して下さい！」

レイアが、不器用な恋人の首に腕を回し、嬉しそうに笑う。

「了解。私の船長さん！」

幸せそうな二つの影が、ジャングルの片隅で一つに重なった。

無事水の補給が済んだゴールデン・フィッシュ号は、名前の由来となっている、魚に似た金色の船体をゆっくりと上昇させた。

太陽の光を反射したその船体が一瞬キラキラと光を放ち、やがてスピードを上げて上空へと消えて行った。

「たー君。どうしたの？」

花壇の前にしゃがみ込んだまま、空を仰いで何かをじいっと見つめている五歳の息子に、若い母親がその顔を覗き込みながら問いかける。

「うん。あのね、大きなアリさんが、金色のお魚さんに乗って飛んで行ったの！　びゅう〜んって飛んだんだよっ！」

大きな黒い瞳を輝かせて喜色満面で話をする我が子に対し　「まあ、何て想像力が豊かなのかしら」と、ちよつと的外れな感心の仕方をした母親は、にこにこ息子頭の頭を優しく撫でた。

「あ、ほら、たー君。見てごらん。アリさんがカマキリさんを運んでるわよ。力持ちねー」

母親の指さした先では、小さな茶色の二匹の働き蟻が、自分たち

の何倍もあるカマキリの死骸を、巢に運ばうと奮闘していた。

その時、花壇の散水機が定時の散水を始めた。水飛沫がくるくると螺旋を描いて光のしずくを飛ばす。

「あ、お母さん、虹！ 虹がでたよ！」

「本当。綺麗ねー」

六月の晴天の昼下がり。

それは、 広大な宇宙空間の辺境惑星「地球」の日本国にある公園の、ちよつと手入れが悪くて下草の伸びた花壇の中で繰り広げられた、小さな小さな冒険譚であった。

おわり

第三話 ゴールデン・フィッシュ号危機一髪！（後書き）

B級SFを狙ってみました。（笑）

決して、科学的根拠を求めないで下さい。ぶっ飛びます。

実はこれは、とあるサイトで、「三題小説」と言う企画に参加させて頂いた物です。

お題は「金魚・解・蟻」です。

既定は、6000文字以内の短編。

少しでも、面白いと思って下さったなら嬉しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5806a/>

水樹 裕 短編集

2009年6月5日23時45分発行